

# 高齢者の自己決定の関連要因に関する研究

：老人福祉センター等を利用している高齢者対象のアンケート調査を通して

## Factors related to self-determination of the elderly

：Questionnaire survey for the elderly who using the community centers

笠原幸子, 畑智恵美

Kasahara Sachiko, Hata Chiemi

### 抄録

目的：本研究は、高齢者が望ましい高齢期の生活を意図的に形成し、いきいき暮らすため、高齢者自身に帰属する構成要素（条件）の一つとして、高齢者の「自己決定」の実践に着目し、高齢者の自己決定に関連する要因を検討することを目的とする。本研究の対象者は、高齢者のなかでも活動範囲が比較的広く、健康水準も比較的高い集団である。方法：調査対象者は、自分自身の意思で老人福祉センター等の地域活動施設を利用している人 350 名を対象に、無記名自記式の質問紙調査を行った。解析は欠損値のない 232 票を用い、「自己決定の実践度」を従属変数に、「外出の頻度」、「金銭管理に関する実践度」、「世間体に対する意識」、「身だしなみに対する意識」、「高齢者観」などを独立変数に設定し、重回帰分析を行った。結論：金銭管理の実践度が高く、日常的に外出する頻度が多く、身だしなみに気遣いをしている高齢者、世間体を気にしない高齢者において自己決定の実践度が高い傾向がみられた。

キーワード：高齢者, 自己決定, 主体性, 質問紙調査

## I. 緒言

厚生労働省に「我が事・丸ごと」地域共生社会実現本部が 2016 年に設置されてから、地域住民が役割を持ち、支え合いながら、自分らしく活躍できる地域共生社会の実現が注目されている。我が事とは、自分の暮らす地域をより良くしたいという住民主体を意味する。地域共生社会の実現に寄与できるように、2017 年成立した改正社会福祉法第 4 条では、地域住民は地域福祉を推進する主体として、事業者及び社会福祉に関する活動を行う者と協力すること、福祉サービスを必要とする地域住民も地域社会を構成する一員として日常生活を営み、社会、経済、文化その他あらゆる分野の活動に参加する機会を「与えられる」者ではなく、「確保される」者と位置付けた。このように、地域住民が主体的に社会活動するための環境が整備されてきた。しかし、地域力強化検討会が示しているように、「我が事」の意識は他者から押し付けられて持てるものではない。「我が事」の意識を育むためには、コントロール感を持って

生活することが求められる。生活コントロール感を育み維持するための1つの方法が自己決定の実践であると考えられる。特に、近年、若い世代に支えられるべき存在とされてきた高齢者が、場合によっては支える側の役割も期待されているなか、生活コントロール感を持つことは重要である。

多くの人の関心は、1946年～1949年に生まれた団塊の世代が75歳以上となる2025年である。彼（彼女）らは、第二次世界大戦後、急激に変化した社会で成長し、高度経済成長の担い手であり、核家族化、大量生産大量消費を経験した。新しい人生観・価値観・習慣等を受け入れ、新しいライフスタイルの担い手であり続けている人たちである。活躍してきた半世紀の間に、平均寿命はおおよそ30年延びた。支援が必要な人たちだけではなく、彼（彼女）らの強みに光を当てることも、ソーシャルワークに求められる。故に、彼（彼女）らに合致した主体性の研究が期待される。

長期間にわたる高齢期の生活を充実させたいと考えた時、自分に関わる事柄については自分で決めるという「自己決定」は重要な概念の一つである。

自己決定に関しては、バイステックの7原則における自己決定原則がよく知られているが、障がい者福祉の分野では、障がい者の自立生活運動における自己決定言説の広がりとともに、立石<sup>1)</sup>、稲沢<sup>2)</sup>、与那嶺<sup>3)</sup>らがSDM (shared decision making) の概念を取り入れながら障がい者の自己決定について論じている。

高齢者福祉の分野では、酒井<sup>4)</sup>、セリグマン<sup>5)</sup>、角田<sup>6)</sup>、水澤<sup>7)</sup>、笠原<sup>8)</sup>は、主として自己決定能力が低下しつつある虚弱（認知症）高齢者等に焦点を当て、「高齢者は思いがあっても、家族に及ぼす影響を考慮し、家族の希望を優先する時がある」<sup>6)</sup>、「自己決定が阻害され続けると、現状を無理に肯定し、無力感を感じて、すべてをあきらめしまう『学習された無力感』の状態になる」<sup>5)</sup>といった指摘のように、高齢期は情報を理解する能力が低下し、他者からの影響を受けやすいため、専門職の支援を含めた高齢者の自己決定について論じる研究が多い。

一方、自己決定の行使について、児島<sup>9)</sup>は、自己決定を行使したら、それに伴う責任も引き受けなければならないという厳しい側面に着目して、「自己決定すべき」といった自己決定至上主義は誤認ではないかと指摘しているし、安梅ら<sup>10)</sup>は「自らの生活を自分の意のままに決定する自己決定は基本的人権の1つであり、本人の意に反した強制、すなわち自己決定の阻害は虐待に該当する」というように、自己決定の行使についても対極に位置する言及がある。

上記のように、自己決定については、自己決定能力が低い人たちへの支援を含めた研究が多いが、健康、生きがい形成、幸福な老い等に寄与する<sup>11-14)</sup>といわれている社会活動（注1）に参加している高齢者の「自己決定」に着目した研究は少ない。

そこで、本研究では、一人ひとりの高齢者が望ましい高齢期の生活を意図的に形成し、いきいき暮らすため、専門職（ソーシャルワーカー）の支援を考えていく上の第一歩として、

老人福祉センター（注2）等を利用している高齢者の自己決定に関連する要因を検討することを目的とする。

なお、本研究では、先行研究<sup>15-17)</sup>を踏まえて、高齢者の自己決定の操作的定義を「これまで生きてきた背景の下、自分自身の目的と考え方に従って、価値があると判断した内容を選択し、表出し、実行する過程」とする。

## Ⅱ. 方法

### 1. 調査対象者及び調査方法等

調査対象者は、自分自身の意思で老人福祉センター等の地域活動施設を利用している人たちである。よって、高齢者のなかでも活動範囲が比較的広く、健康水準も比較的高い集団である。回答者は2つの市の合計7ヶ所の老人福祉センター等で活動している、合計350名であった。調査実施にあたり、まず老人福祉センター等の管理運営責任者に調査の趣旨を文書と口頭で説明し、承諾を得られた場合、指定された日時に老人福祉センター等を訪問した。訪問した日、当該老人福祉センター等の利用者に、文書と口頭で調査の趣旨を説明し、了解の得られた者に調査票を配布し、その場で自記式にて調査票に回答していただき、回答者のプライバシー保護の観点から、厳封した投函用ボックスにて回収する方法を採った。調査は2017年4月から8月に実施した。

### 2. 調査内容

調査内容は、調査対象者の属性（年齢、性別、家族構成、居住年数等）、「自己決定の実践度」、「主観的な健康度」、「外出の頻度」、「金銭管理に関する実践度」、「世間体に対する意識」、「身だしなみに対する意識」、「高齢者観」など、先行研究<sup>18-21)</sup>により高齢者の自己決定に関連すると推測された項目を設定した。

「主観的な健康度」、「外出の頻度」、「金銭管理に関する実践度」、「世間体に対する意識」、「身だしなみに対する意識」は厚生労働省の「2016年度介護予防・日常生活圏域ニーズ調査」<sup>22)</sup>及び内閣府の「平成24年高齢者の健康に関する調査」<sup>23)</sup>、「平成26年度高齢者の日常生活に関する意識調査」<sup>24)</sup>を参考にした。

高齢者の「自己決定の実践度」については、「自分のことは、自分で決めていますか」と問い、回答は「はい（5点）」「どちらかというとはい（4点）」「どちらでもない（3点）」「どちらかというといいえ（2点）」「いいえ（1点）」の5件法で求めた。

日本人の「高齢者観」については、古谷野<sup>25)</sup>は、伝統的な敬老精神と否定的な高齢者観が共存するメカニズムが存在すると指摘し、副田は、「高齢者に接する時の態度として『タマエ』と『ホンネ』があり、さらに、それらが行動する主体としての高齢者と、働きかけを受

ける客体としての高齢者が設定されている」<sup>26)</sup>と指摘し、表1のような二重構造を提案した。約40年前の副田の提案ではあるが、手島の「政府は高齢者の政府への依存度を縮減することもねらい、自立し積極的に社会に参加する高齢者像を強調するものの、二重構造に影響を与えるまでには至っていない」<sup>27)</sup>という指摘から、副田の日本人の老人観の構造を採用し、計9項目の高齢者観を設定した。「はい(5点)」「どちらかというとはい(4点)」「どちらでもない(3点)」「どちらかというといいえ(2点)」「いいえ(1点)」の5件法で回答を求めた。

表1 日本人の老人観の構造

	タテマエ	ホンネ
客体としての老人についての意識	敬老思想 (第1領域)	老人への蔑視意識 老人への無関心 (第2領域)
主体としての老人についての意識	枯れた老人 賢者としての老人 (第3領域)	子どもに返った老人 愚者としての老人 (第4領域)

出典 副田義也(1978):主体的な老年像を求めて,現代のエスプリ 126,5-24

### 3. 解析方法

統計解析は、まず、独立変数として投入予定の「高齢者観」の因子構造を実証的にとらえるために、9項目の質問項目を用いて因子分析(主因子法、スクリープロットにより因子数を決定、プロマックス回転)を行った。但し、各項目で因子負荷量がおおよそ0.4以下の項目、複数の因子に対して因子負荷量が高い項目を削除対象として検討しながら、因子分析を行った。

次いで、研究モデルとして設定した複数の独立変数から、統計的に有意な変数を選定するため、「自分のことは自分で決めている(自己決定の実践度)」を従属変数とし、「主観的な健康度」、「外出の頻度」、「金銭管理に関する実践度」、「世間体に対する意識」、「身だしなみに対する意識」、「高齢者観」、「年齢」、「性別」、「居住年数」等を独立変数とした段階的重回帰分析を行った。段階的重回帰分析で探索的に行い、適切な独立変数を選定した後、強制投入法で再度分析した。すべての統計処理にはIBM SPSS ver.25を用いた。

#### 4. 倫理的配慮

調査実施にあたっては、まず、老人福祉センター等の管理運営責任者へ調査目的を文書と口頭をもって説明し、承諾を得られた場合、指定された日時に、当該老人福祉センター等の指定場所を訪問した。指定場所にて社会活動されている調査対象者に対して、調査協力の可否は回答者の自由意志（任意）とし、辞退によって何ら不利益も生じないこと、調査対象者及びデータは個人のプライバシーの保護に十分配慮し、匿名性が確保されること等を文書と口頭で説明した。回答は、無記名自記式で求め、調査協力の承諾が得られた場合のみ、回答を行う形式を採り、調査の回答をもって調査の同意を得ることとした。

本調査は四天王寺大学研究倫理審査委員会の審査・承認（承認番号 16-10）を得て実施した。

### Ⅲ. 結果

統計解析には、回答された 350 名分の調査票のうち、欠損値のない回答票、232 票（有効回答率：66.3%）を用いた。

#### 1. 分析対象者の属性（表 2）

性別は、男性 58 人（25.0%）、女性 174 人（75.0%）であり、平均年齢は 76.0 歳であった。居住年数は、平均 34.1 年で、家族構成は、「一人暮らし」33.6%、「夫婦二人暮らし」41.8%、「息子・娘等と同居」24.6%であった。

表 2 分析対象者の属性（n=232）

項目	人数	(%)	
性別	男性	58	25.0%
	女性	174	75.0%
年齢	平均 76.0 歳（標準偏差 6.7、範囲 50～94）		
居住年数	平均 34.1 年（標準偏差 18.9、範囲 3 カ月～88 年 3 カ月）		
家族構成	一人暮らし	78	33.6%
	夫婦二人暮らし	97	41.8%
	息子・娘など同居	57	24.6%

## 2. 「自分のことは自分で決めている（自己決定の実践度）」及び分析対象者の意識の回答分布（表3）

「自分のことは、自分で決めていますか」という高齢者の自己決定の実践度に関する問いに対して、回答は「はい（5点）」は77.6%、「どちらかというとはい（4点）」は17.7%、「どちらでもない（3点）」3.9%、「どちらかというといいえ（2点）」0.9%、「いいえ（1点）」0.0%であった。回答が最大値に偏る結果となり、天井効果が確認された。

「主観的な健康度」、「世間体に対する意識」、「身だしなみに対する意識」、「外出の頻度」、「金銭管理に関する実践度」、「近所付き合いの程度」の回答分布は、表3の通りである。

表3 分析対象者の意識（n=232）

項目		人数	(%)	平均値	標準偏差
自分のことは自分で決めていますか (自己決定の実践度)	はい(5点)	180	77.6%	4.79 (5点満点)	0.58
	どちらかというとはい(4点)	41	17.7%		
	どちらでもない(3点)	9	3.9%		
	どちらかというといいえ(2点)	2	0.9%		
	いいえ(1点)	0	0.0%		
現在の健康状態について、どのように思われますか (主観的な健康度)	非常に健康である(4点)	21	9.1%	2.92 (4点満点)	0.52
	まあ健康である(3点)	174	75.0%		
	あまり健康でない(2点)	35	15.1%		
	健康でない(1点)	2	0.9%		
世間体を気にする方ですか (世間体に対する意識)	気にしない(1点)	51	22.0%	2.79 (4点満点)	0.85
	どちらかというとは気にしない(2点)	94	40.5%		
	どちらかというとは気にする(3点)	74	31.9%		
	気にする(4点)	13	5.6%		
身だしなみに気をつける方ですか(身だしなみに対する意識)	気をつける(4点)	129	55.6%	3.44 (4点満点)	0.72
	どちらかというとは気をつける(3点)	80	34.5%		
	どちらかというとは気にしない(2点)	19	8.2%		
	気にしない(1点)	4	1.7%		
週に何回くらい外出していますか (外出の頻度)	週に5回以上(4点)	85	36.6%	3.19 (4点満点)	0.77
	週に2～4回(3点)	117	50.4%		
	週に1回(2点)	20	8.6%		
	ほとんど外出しない(1点)	10	4.3%		
自分のお金は、自分で管理していますか (金銭管理に関する実践度)	している(4点)	195	84.1%	3.73 (4点満点)	0.70
	どちらかというとはしている(3点)	20	8.6%		
	どちらかというとはしていない(2点)	9	3.9%		
	していない(1点)	8	3.4%		
近所との付き合いはどの程度ですか (近所付き合いの程度)	互いに相談したり協力したりする(4点)	56	24.1%	2.97 (4点満点)	0.72
	日常的な立ち話程度(3点)	115	49.6%		
	あいさつ程度(2点)	60	25.9%		
	付き合いはまったくしていない(1点)	1	0.4%		

### 3. 「高齢者観」の回答分布と因子構造の検討（表4・5）

「高齢者観」の回答分布は表4の通りである。

「高齢者観」に関する探索的因子分析の結果、表5のように2つの因子が抽出された。第1因子は、「高齢者は、相談相手になる（第1領域）」、「高齢者は、尊敬される存在である（第1領域）」、「高齢者は、知恵や知識がある（第3領域）」の3項目で構成された。よって、この因子を「肯定的高齢者観」と解釈した。第2因子は、「高齢者は、役割がなくなっていく（第2領域）」、「高齢者は、頑固で、気むずかしい（第4領域）」の2項目で構成された。よって、この因子を「否定的高齢者観」と解釈した。

各因子の平均値を確認すると「肯定的高齢者観」（ $3.59 \pm 0.59$ ）の方が高い。また、それぞれの因子について因子得点間の相関、共通性、因子寄与率、Cronbachの $\alpha$ 係数を確認した結果、「否定的高齢者観」については「高齢者は、役割がなくなっていく（第2領域）」、「高齢者は、頑固で、気むずかしい（第4領域）」の2項目が「否定的高齢者観」に対して、比較的高い負荷量を示したが、信頼性の指標であるCronbachの $\alpha$ 係数が0.446と低い値であった。

表4 分析対象者の高齢者観（n=232）

項目	人数	(%)	平均値	標準偏差	
高齢者は おだやかである (第3領域)	はい(5点)	39	16.8%	3.54	0.94
	どちらかというとはい(4点)	79	34.1%		
	どちらでもない(3点)	84	36.2%		
	どちらかというといいえ(2点)	28	12.1%		
	いいえ(1点)	2	0.9%		
高齢者は、日常の生活 動作においてできない ことが増えてくる (第4領域)	はい(5点)	64	27.6%	3.97	0.90
	どちらかというとはい(4点)	118	50.9%		
	どちらでもない(3点)	32	13.8%		
	どちらかというといいえ(2点)	14	6.0%		
	いいえ(1点)	4	1.7%		
高齢者は、 知恵や知識がある (第3領域)	はい(5点)	49	21.1%	3.84	0.79
	どちらかというとはい(4点)	104	44.8%		
	どちらでもない(3点)	72	31.0%		
	どちらかというといいえ(2点)	7	3.0%		
	いいえ(1点)	0	0.0%		
高齢者は、尊敬される 存在である (第1領域)	はい(5点)	32	13.8%	3.59	0.81
	どちらかというとはい(4点)	88	37.9%		
	どちらでもない(3点)	98	42.2%		
	どちらかというといいえ(2点)	13	5.6%		
	いいえ(1点)	1	0.4%		
高齢者は、頑固で、 気むずかしい (第4領域)	はい(5点)	30	12.9%	3.48	0.90
	どちらかというとはい(4点)	80	34.5%		
	どちらでもない(3点)	100	43.1%		
	どちらかというといいえ(2点)	16	6.9%		
	いいえ(1点)	6	2.6%		

高齢者は、役割が なくなっていく (第2領域)	はい(5点)	23	9.9%	3.46	0.96
	どちらかというとはい(4点)	103	44.4%		
	どちらでもない(3点)	77	33.2%		
	どちらかというといいえ(2点)	16	6.9%		
	いいえ(1点)	13	5.6%		
高齢者は、ものごとの 本質をみて、うろたえ たりしない (第3領域)	はい(5点)	22	9.5%	3.36	0.85
	どちらかというとはい(4点)	72	31.0%		
	どちらでもない(3点)	107	46.1%		
	どちらかというといいえ(2点)	29	12.5%		
	いいえ(1点)	2	0.9%		
高齢者は、さまざまな サービスの対象である (第2領域)	はい(5点)	29	2.5%	3.59	0.85
	どちらかというとはい(4点)	101	43.5%		
	どちらでもない(3点)	83	35.8%		
	どちらかというといいえ(2点)	15	6.5%		
	いいえ(1点)	4	1.7%		
高齢者は、 相談相手になる (第1領域)	はい(5点)	32	13.8%	3.63	0.87
	どちらかというとはい(4点)	105	45.3%		
	どちらでもない(3点)	77	33.2%		
	どちらかというといいえ(2点)	13	5.6%		
	いいえ(1点)	5	2.2%		

表5 「高齢者観」の因子分析結果

KMO = .661、N = 232

変数 (質問項目)	因子負荷		共通性
	第1因子	第2因子	
第1因子：肯定的高齢者観			
Q5-9 高齢者は、相談相手になる	0.750	-0.119	0.631
Q5-4 高齢者は、尊敬される存在である	0.705	0.115	0.820
Q5-3 高齢者は、知恵や知識がある	0.689	0.003	0.692
第2因子：否定的高齢者観			
Q5-6 高齢者は、役割がなくなっていく	0.037	0.750	0.787
Q5-5 高齢者は、頑固で、気むずかしい	-0.013	0.641	0.628
プロマックス回転後の因子寄与	2.176	1.340	3.516
プロマックス回転後の因子寄与率 (%)	34.014	16.548	50.562
Cronbach の $\alpha$ 係数	0.732	0.446	
平均値 <sup>注1)</sup> (標準偏差)	3.59 (± 0.59)	3.47 (± 0.75)	
因子間相関			
第1因子：肯定的高齢者観	1.000		
第2因子：否定的高齢者観	-0.256	1.000	

主因子法 (プロマックス回転)

注1) 因子ごとの合計素得点の平均値を項目数で除したものである



#### 4. 重回帰分析の結果（表6）

モデル全体の検定でp値が0.000と十分に低いことからモデルの適合度は高いと判断した。「自分のことは、自分で決めていますか」という高齢者の自己決定の実践度において、「金銭管理に関する実践度」は0.1%水準で、「身だしなみに対する意識」、「外出の頻度」は1%水準で、「肯定的高齢者観」は5%水準で有意な正の関連が認められた。「世間体に対する意識」は1%水準で有意な負の関連が認められた。「一人暮らしの有無」と「近所付き合いの程度」は、有意な差は認められなかった。

また、分析の過程において、「主観的な健康度」は有意な差が認められず、「主観的な健康度」を重回帰分析に投入してもしなくても、出力結果において重相関係数に変化しなかったため分析モデルから削除した。「否定的高齢者観」はCronbachの $\alpha$ 係数の値が低いこと、有意な差が認められなかったことにより、分析モデルから削除した。「年齢」においては、「高齢者の自己決定の実践度」と「年齢」の相関よりも、ベータの値が高く、抑圧の存在が確認されたため、分析モデルから削除した。なお、強制投入した独立変数においては、VIF値はいずれも1.3未満であり、独立変数間に多重共線性がないことを確認した。

表6 高齢者の「自己決定の実践度」の重回帰分析結果

投入変数	高齢者の「自己決定の実践度」	
	$\beta$ 値	t 値
自分のお金は、自分で管理していますか（金銭管理に関する実践度）	0.306	4.882 ***
身だしなみに気をつけるほうですか（身だしなみに対する意識）	0.165	2.623 **
世間体を気にする方ですか（世間体に対する意識）	-0.159	-2.619 **
週に何回くらい外出していますか（外出の頻度）	0.171	2.872 **
近所との付き合いはどの程度ですか（近所付き合いの程度）	0.106	1.745
肯定的高齢者観	0.149	2.536 *
一人暮らしの有無（一人暮らし=0、一人暮らし以外=1）	-0.096	-1.647
$R^2$	0.290***	
モデルのF値	13.041 (7, 232)	

\*p<0.05, \*\*p<0.01, \*\*\*p<0.001

## IV. 考察

### 1. 独立変数に設定した変数の回答結果の考察

「現在の健康状態について、どのように思われますか（主観的な健康度）」は、「非常に健康である」と「まあ健康である」を合算すると、8割以上であった。内閣府が実施した「平成24年高齢者の健康に関する調査結果」<sup>23)</sup>では、現在の健康状態について「良い」と「まあ良い」を合算すると5割以上であったため、本調査の分析対象者は、日常的に老人福祉センター等を利用されているため、このように高い値であったことが推測された。

「世間体を気にする方ですか（世間体に対する意識）」については、世間を「個人が関係する広義の所属集団であり、個人が準拠すべき規範をもつ準拠集団」とし、このような世間から自分はどのように見られているのかという個人の意識を世間体と捉えると<sup>18)</sup>、本調査の分析対象者は、「気にしない」と「どちらかという気にしない」を合算すると6割以上の人が、世間から自分はどのように見られているのかについて、気にしない傾向があり、世間の規範に準拠しようとする同調行動やそれに伴う行動規制が低いことが推測された。

「身だしなみに気をつける方ですか（身だしなみに対する意識）」は、「気をつける」が5割以上を占めていた。作表はしていないが、「性別」と「身だしなみに気をつける方ですか（身だしなみに対する意識）」のクロス集計結果においては、有意な差が見られなかった。つまり、身だしなみは女性に特化したものではないことが推測された。また、身だしなみは、「外見的な魅力を引き出すだけでなく、行動面に影響している」<sup>28)</sup>という指摘があるように、本調査の分析対象者は、日常的に老人福祉センター等を利用されているため、このような高い値であったことが推測される。内閣府が実施した「平成26年度高齢者の日常生活に関する意識調査結果」でも「おしゃれへの関心度」において、「おしゃれをしたい」は69.1%であった<sup>24)</sup>。但し、身だしなみに対する意識は逆L字型の分布を認めた。回答選択肢の「気をつける」には、もっと度合いを細かく段階分けして設定すれば、正規分布曲線を描けたかもしれない。つまりこの尺度は、分析対象者集団が持っている回答の分布をきちんと測定できていないことが認められた。

「週に何回くらい外出していますか（外出の頻度）」は、「週に2～4回」が50.4%で最も高かった。内閣府が実施した「平成26年度高齢者の日常生活に関する意識調査結果」の「あなたは、何かの用（散歩なども含めます）で出かけることが、週に何日くらいありますか」で、「週に1回」が7.8%、「ほとんど外出しない」4.8%<sup>24)</sup>であった（他の選択肢は回数の区分が異なっていたため比較できない）。週1回以下に着目すると、本調査結果と近似していた。

「自分のお金は、自分で管理していますか（金銭管理に関する実践度）」は、「している」が8割以上であった。金銭管理に関する実践度においても、逆L字型の分布を認めた。回答

選択肢の「している」には、もっと度合いを細かく段階分けして設定すれば、正規分布曲線を描けたかもしれない。つまりこの尺度は、分析対象者集団が持っている回答の分布をきちんと測定できていないことが認められた。しかし、「消費行動を通じて身体的な変化とともに精神機能への影響が生じる」<sup>29)</sup>と指摘されていることから、金銭管理に関する実践は自己決定の実践に対して、何らかの影響を及ぼしていることが推測された。

「近所との付き合いはどの程度ですか（近所付き合いの程度）」は、「日常的な立ち話程度」が約5割で、軽いお付き合いが最も多かった。内閣府が実施した「平成26年度高齢者の日常生活に関する意識調査」<sup>24)</sup>においても、近所付き合いの程度は「あいさつをする程度」が61.8%で最も多かった。本調査の結果と近似していた。岩川が「近所付き合いは主体となって活躍できる一歩となる」<sup>30)</sup>と指摘しているように、いきいき暮らすためには、支え合いや助け合いを育むことができる開かれたライフスタイルが、無理のない程度で求められるのかもしれない。

## 2. 「自分のことは自分で決めている（自己決定の実践度）」の考察

「自分のことは、自分で決めていますか」という高齢者の自己決定の実践度に関する問いに対して、回答は「はい（5点）」が77.6%を占めた。日常生活における自己決定には、衣服の選択や飲み物の選択等小さな自己決定から、住まいを決定するような大きな自己決定まである。「高齢者の自己決定」を構成する下位領域を設定し、領域毎に下位項目の設定が求められた。重回帰分析の結果では、モデルの適合度は高いと判断されたが、当該項目の貢献度は低いことを認識し、自己決定について細かく段階分けして設定することが求められる。

## 3. 「高齢者観」の因子構造の考察

「高齢者観」の構造は、副田の整理に従い、①客体としての高齢者についての意識：タテマエ、②客体としての高齢者についての意識：ホンネ、③主体としての高齢者についての意識：タテマエ、④主体としての高齢者についての意識：ホンネ、4つの領域で構成した。第1因子の「肯定的高齢者観」は、仮説として設定した①客体としての高齢者についての意識：タテマエに属する「高齢者は、相談相手になる」、「高齢者は、尊敬される存在である」と、③主体としての高齢者についての意識：タテマエに属する「高齢者は、知恵や知識がある」から構成された。このような結果は、高齢者自身に敬老思想と賢者としての高齢者観が内面化されていることが推測された。第2因子の「否定的高齢者観」は、仮説として設定した②客体としての高齢者についての意識：ホンネに属する「高齢者は、役割がなくなっていく」と、④主体としての高齢者についての意識：ホンネに属する「高齢者は、頑固で、気むずかしい」から構成された。このような結果は、タテマエの陰に潜んでいる高齢者自身のホンネの部分に光が当たったようだ。しかし、蔑視や愚者としての高齢者観は、マスコミなどによって強調された否定的なステレオタイプが反映されただけで、高齢者のなかでも活動範

囲が比較的広く、健康水準も比較的高い高齢者自身が真に同意しているとは考えにくい。

#### 4. 重回帰分析結果の考察

自分で金銭管理を行い、日常的に外出する頻度が多く、身だしなみを気にしている高齢者は、それ以外の高齢者よりも自分のことは自分で決めていた。岩間が「ソーシャルワークにおいては、従来からワーカビリティやコンピテンスといったクライアント自身がつもつ問題解決能力を重視してきた。問題を解決するのはあくまで本人であるが、当然その解決とは社会関係のなかで展開されるものである」と指摘しているように、外出（外出先も含める）を決めたり、自分の洋服を選んだり、お金の使い方を決めたりする方向性は、社会に向けられている。日常生活での継続的な自己決定の経験の積み重ねが重要であると考えられる。また、世間体を気にしない高齢者の方が自分のことは自分で決めていた。池原が、「自己決定の前提には、多様な人間関係や社会関係を通じた知識や経験がある」<sup>23)</sup>と指摘しているように、社会関係に基づく状況認識は自己決定に関連していた。

また、「高齢者は尊敬される存在である」等の「肯定的高齢者観」は、自分で決めることができる自信に連動すると考えられる。高齢者観は長期間にわたる生活歴の中から内面化されたものであると推測された。このような考察から、自己決定の実践は、自分で決めるという事象を横断的に考察するよりも、過去・現在・未来といった時間軸で縦断的に考察することが求められるのかもしれない。また、年齢や性別も有意な差が見られなかった。高齢者が「自分のことは自分で決めている」という行為は、年齢や性別ではなく、どのような人生（生活）を生きてこられたのか、その積み重ねから、どのような思考傾向（価値観）を持っているかが重要であることが推測された。

独立変数として「一人暮らしの有無」は、有意な差が見られなかった。一人暮らしの高齢者の方が、自分のことは自分で決めているという仮説を設定していたが、仮説は棄却された。妥当な考察は難しいが、遠藤が「自分の意思というものは、自分ひとりで決めていくものではなく、周囲の人との関わりの中で決めていくもの」<sup>24)</sup>と指摘しているように、多様な他者の関与や環境の中で、高齢者は自分のニーズを修正・変更しながら明確し、自己決定していることが推測された。つまり、世間からどのように見られているかということについては関心が低いですが、自分のことを決めるときに、高齢者は意味のある周囲の人たちとの関わりの中から決めていくことが推測された。そうであるならば、高齢者の傍にいる専門職（ソーシャルワーカー）の役割も重要であることが推測された。

## V. 結論

本研究では、一人ひとりの高齢者が望ましい高齢期の生活を意図的に形成し、いきいき暮らすため、高齢者自身に帰属する構成要素（条件）の一つとして高齢者の「自己決定」に着目し、老人福祉センター等を利用している高齢者の自己決定に関連する要因を検討した。その結果、金銭管理の実践度が高く、日常的に外出する頻度が多く、身だしなみに気遣いをしている高齢者、世間体を気にしない高齢者において自己決定の実践度が高い傾向がみられた。本研究の結果は、それぞれの人生を歩み、多様な生活をしている高齢者の実像の1つの側面を捉えたにすぎない。QOL評価スケールを用いてQOLを評価してもQOLは向上しないことと同様に、高齢者の自己決定に関連する要因について明らかにしても高齢者の自己決定は促進されないし、高齢者が主体的な生活をするようになるわけではない。

今後は、①高齢期の主体的な生活を維持するため、ソーシャルワークがどのように寄与できるのかについての研究が求められる。また、②重回帰分析の結果、「自己決定」の実践を予測する重回帰モデルの説明力が高いとはいえない。本調査で取り上げた独立変数以外の要因の存在が考えられる。どのような要因が関連しているのかについて、さらに検討することが求められる。③パイロット研究を重ねて回答の個人差を最大限に引き出すような項目の構成が求められる。

本調査の実施にあたり、調査にご協力いただきましたA市及びB市の高齢者のみなさま並びに老人福祉センター等の管理運営責任者のみなさまに深謝申し上げます。

本稿にて使用したデータは、科学研究費助成事業・基盤研究C・15K04020の一部として行ったものである。また、B市の高齢者調査に関しては、平成30年度四天王寺大学地域課題解決研究奨励金の助成を受け、本学学生とともに取り組んだ。

### 注

1. 岡本は「社会活動は、概念定義に一致した見解があるわけではないため、研究によりさまざまな捉え方があるのが現状である」と指摘している。故に、本稿では、社会活動をしている高齢者を、家庭外の対人活動のなかの趣味活動に参加している、つまり、老人福祉センター等を利用している高齢者に限定した。岡本秀明（2014）：地域高齢者の社会活動研究における概念定義と測定及び活動参加促進要因，老年社会科学第36巻第3号，347。
2. 老人福祉センターは、老人福祉法第14条において、地域の老人に対して、各種の相談に応ずるとともに、健康の増進、教養の向上及びレクリエーションのための便宜を総合的に供与し、もつて老人に健康で明るい生活を営ませることを目的とすると規定されている。具体的には、①趣味や娯楽を通じた交流（サークル活動）の場の提供、②地域交流の機会として、様々なイベントや行事の開催、③教養講座や生涯学習の開講、④健康に関する相談や体力維持・向上のための機能訓練等が実施されている。多くの高齢者

は、囲碁・将棋・手芸・ダンス・カラオケ・卓球等の趣味活動や健康体操等を媒体とした活動をしている。これらの活動は誰でも取り掛かりやすく、これまでの経歴や年齢・性別等を超えてつながりができやすいことが長所である。これらの趣味活動の延長線上に、新たな社会活動が発足したりする。

## 参考文献

1. 立石真也 (1997) : 私的所有論, 勁草書房.
2. 稲沢公一 (2000) : 『自己決定』をめぐる問題状況: 決定空間の変容に向けて, 福祉科学とコミュニティ 1, 15 - 24.
3. 与那嶺 司・岡田 進一・白澤 政和 (2009) : 生活施設における知的障害のある人の自己決定の構造 - 担当支援職員による質問紙に対する回答を基に, 社会福祉学 49 (4) (通号 88) ,27-39.
4. 酒井忠昭 (1998) 高齢患者の自己決定; 医療の側面から老年期における自己決定のあり方に関する調査研究, 国際長寿センター ,15.
5. M. セリグマン (2000) : 津田彰監訳: 学習性無力感; パーソナル・コントロールの時代をひらく理論, 二瓶社 ,28.
6. 角田ますみ (2004) : 高齢者ケアにおける「自己決定」, 臨床看護 30 (12) ,1840.
7. 水澤久恵・出貝裕子 (2011) : 認知症高齢者の自己決定に関する文献の動向, 新潟医学会雑誌 125 (8) ,443-450.
8. 笠原幸子 (2016) : 虚弱高齢者の生活行動における自己決定に関する研究—具体的支援方法に焦点をあてて—, 四天王寺大学紀要 62 号 ,7-19.
9. 児島亜紀子 (2001) : 社会福祉における「自己決定」—その問題性をめぐる若干の考察, 社会問題研究, 51 (1-2) ,331-342.
10. 安梅勅江, 鈴木英子 (2006) : 家族の介護意識と要介護者の自己決定阻害の関係に関する研究 - 高齢者虐待の予防に向けて -, 厚生指針第 53 巻第 8 号 ,25-33.
11. 中村好一・金子勇・河村優子他 (2002) : 在宅高齢者の主観的健康観と関連する要因, 日本公衆衛生雑誌 49, 409-416.
12. 松田晋哉・筒井由香・高島洋子 (1998) : 高齢者の生きがい形成に関連する要因の需要分析, 日本公衆衛生雑誌 45, 704-712.
13. Larson R. (1978) : Thirty years of research on the subjective well-being of older Americans, Journal of Gerontology 33,109-125.
14. Rowe, J. W.; Kahn, R. L. (1997) : Successful aging. The Gerontologist 37 (4), 433-440.
15. 狭間佳代子 (2000) : 自己決定とストレスの視点, 社会福祉学 40 巻 2 号, 39-56.
16. 袖井孝子・酒井忠昭・光石忠敬他 (1998) : 老年期における自己決定のあり方に関する調査研究報告書, 国際長寿センター.
17. 堀口康太・大川一郎 (2018) : 高齢者の社会参加活動への自律的動機づけと価値観及び生活史とのつながり—探索的検討—, 高齢者のケアと行動科学第 23 巻, 62-74.
18. 麻原きよみ・百瀬由美子 (1995) : 高齢者の世間体の意識構造と変化要因, 看護研究 Vol.28 (1) ,49-59.
19. 佐藤百合子 (1995) : 高齢者の Q O L と自己決定権, 季刊社会保障研究 ,31 巻 1 号 ,90-99.
20. 稲垣円, 近所づきあいのその先へ—改めて「コミュニティ」を考える, ライフデザインレポート, 第一生命生命経済研究所 ,2018.

21. 秋山弘子編著, 高齢社会のアクションリサーチ: 新たなコミュニティ創りをめざして, 東京大学出版会, 2015.
22. 介護保険法改正によって創設された新しい介護予防・日常生活支援総合事業の評価を通じて地域課題を把握し, 地域包括ケアシステムを構築していく上で有効な支援ツールとなるよう, 地域包括ケア「見える化」システムの中で調査結果の経年比較, 地域間比較が可能となるように, 「介護予防・日常生活圏域ニーズ調査実施の手引き」としてまとめられたなかにある調査票.
23. 今後の高齢社会対策の推進に資することを目的に, 内閣府政策統括官(共生社会政策担当)付高齢社会対策担当で, 平成6年度から実施している. 調査対象は, 全国の55歳以上の男女(施設入所者は除く)3000人で, 調査期間は平成24年9月~10月に実施した. 有効回収数1081人(有効回収率36.0%)平成25年3月に「平成24年高齢者の健康に関する調査結果」報告書を発表した.
24. 日常生活の状況, 生活の満足度, 衣食住をはじめ, 家事, 外出, 日常的楽しみ, 日常生活の情報に関する満足度など, 高齢者の日常生活全般の実態と意識を把握するとともに, 前4回の調査と時系列分析を行い, 今後の高齢社会対策の推進に資することを目的に, 内閣府政策統括官(共生社会政策担当)付高齢社会対策担当で, 昭和49度から実施している. 調査対象は, 全国の60歳以上の男女(平成26年10月1日現在)6000人, 調査期間は平成26年12月に実施した. 有効回収数有効回収数3893人(有効回収率64.9%), 平成27年3月に「平成26年度 高齢者の日常生活に関する意識調査結果」報告書を発表した.
25. 古谷野亘(1993): 第IV部 老化の社会学, 老年学入門, 柴田博・芳賀博・長田久雄ほか編著, 川島書店, 180-184
26. 副田義也(1978): 主体的な老年像を求めて, 現代のエスプリ 126, 5-24.
27. 手島洋(2015): 日本の高齢者観の形成と現状, 県立広島大学保健福祉学部誌 15(1), 23-34.
28. 庄山茂子・石川麻梨・栃原裕他(2004): 高齢女性の化粧行動に関する研究:-女子学生との比較-, 一般社団法人日本家政学会研究発表要旨集 57(0), 102-102.
29. 長澤弘・牛沢賢二・松岡幸次郎他(2003): 虚弱高齢者および軽度痴呆高齢者の消費行動と身体および精神機能への影響, 第39回日本理学療法学会大会抄録集 Vol.31(2), 762.
30. 岩川幸治(2017): 近所付き合いにおける主体としての自己—住民同士の「支え合い」をめぐる問題—ソシオロジカ, 創価大学社会学会, 29-47.
31. 池原毅和(2014): 法的能力のパラダイムシフト, 季刊福祉労働第143号, 現代書館 8-20,
32. 遠藤美貴(2017): 「自己決定」と「支援を受けた意思決定」, 共立女学院短期大学紀要第48号, 81-94.

## Factors related to self-determination of the elderly

: Questionnaire survey for the elderly who using the community centers

### abstract

Objective: To visualize the factors related to self-determination of the elderly. They are the group of older people with the relatively the board range of activities and the relatively high level of health.

Method: Data were collected from 350 elderly who using the community centers in the two cities and 232 no missing data ware analyzed. The use of multiple regression analysis with SPSS was showed about the relationship between [self-determination] and [frequency of going out],[money management], [Seken-tei: caring about what people would say about them], [well dressed and groomed] , [their views for elderly] .

Result: The significant factors from the result of multiple regression analysis consisted of [money management] ( $p<.001$ ) , [frequency of going out] ( $p<.01$ ) , [Seken-tei: caring about what people would say about them] ( $p<.01$ ) , [well dressed and groomed] ( $p<.01$ ) , [their views for elderly] ( $p<.05$ ) .

Conclusion: The results of the study revealed that the self-determination of elderly contributed to making their lives independent.

### Key wards

Self-determination, elderly, independence, questionnaire survey